

駒澤大學佛教學部論集 第五十四號

二〇二三年十月三十一日 發行

抜刷

原坦山の東京大学仏教学講義

佐藤 厚

原坦山の東京大学仏教学講義

佐藤厚

一、問題の所在

江戸後期から明治中期にかけて活動した曹洞宗僧侶・原坦山（以下坦山、一八一九—一八九二）は、創設まもない東京大学で明治二二年から二〇年まで仏教学の講義を行った⁽²⁾。これは現在にまで続く、大学という近代の制度の中における仏教学研究の始まりということでも重要である。また、そこで講義された『大乘起信論』が、日本近代哲学の特徴である現象即實在論の理論的背景になったとされていることでも重要である⁽³⁾。

従来、坦山の東京大学講義についての研究には参考文献に挙げた古田紹欽、木村清孝の研究があり、中でも講義については、原自身が作成した年度末の教務報告である「申報」をもとに、各年度の教材や講義の様子などが研究されてきた。こうした中、筆者は最近、それらを具体的に知る資料として原坦山の試験問題および成績を記した論文を発見した。試験

問題からは坦山の授業の具体的な姿や問題意識を伺うことができ、さらに成績表からは、参加していた学生の氏名と点数がわかる。

筆者は以前、原坦山と同時期に東京大学で仏教を講義した吉谷覺寿（一八四三—一九一四）の講義の研究を行ったこと⁽⁴⁾がある。これを合わせることにより、初期の東京大学における仏教学講義がより明らかになることが期待される。

二、峰虎溪（玄光）「原坦山師時代における帝国大学の仏教学研究」

雑誌『仏教文芸』（仏教発行所）二巻一号（一九〇三年一〇月）と同巻二号（同年十一月）に峰虎溪（玄光）「原坦山師時代における帝国大学の仏教学研究」が掲載されており、この中に坦山が出した試験問題と受験した学生の成績表が掲載されている⁽⁵⁾。論文を書いた峰玄光は近代の曹洞宗僧侶であり、著書に『人の宝』（明治三七）、『道元禪師伝』（明治

四三）、『仏教家庭訓』（明治四四）、『曹洞教会修証義・冠註』（明治四四）、『曹洞宗寺院名鑑』（大正二）などがある。峰がこの論文を著わした意図を次のように記す。

原坦山師は曹洞宗近來の傑物たりしのみならず、實に我仏教界全般に於ける巨人なりき、渠一たび入って帝國大学に教鞭を執るや、世に顧みられざりし仏教は印度哲学の名の下に、漸く心を形而上学に傾くるもの注意を惹き起しぬ、固より二十年前の当時、仏教研究の高潮に達せる今日より見れば、その幼稚なるは言を俟たざる所なるも、之を回顧するまた多少の興味なきにあらず、曩に予が曹洞宗近世史を研究するに際し、大内先生、之が史料として、坦山師の手録二三を給せらる、中に『試業事故概略』なるものあり、こは坦山師が明治十四年より二十年に至るの間、帝國大学に於ける印度哲学の試験問題並びに受験者の得点を記せるものにして、興味ある史料たるを失はず、依て左に之を抄せんとす。

これによれば近世の曹洞宗の歴史を研究していた峰が、原坦山の弟子であった大内青巒（一八四五—一九一八）から原坦山に関する史料を受けた中にこの資料があり公開したということである。大学時代の試験問題と成績を公表することは、

現代では個人情報保護の観点から考えられないことであるが、当時も大丈夫だったのだろうか。大内青巒が試験問題と成績一覧を持っていたことについては『原坦山全集』の序文で大内自身が語っている。

『仏教文芸』二巻一号には明治一四年一二月の試験から明治一五年十二月の試験の前半まで、二号には明治一五年十二月の試験の後半から明治一八年六月の試験までが収録されている。二号の末尾に「未完」とあり、その後の掲載を予告しているが、管見の限り掲載されなかつたようである。よつて我々が知ることができるのは、明治一四年度から一七年度までの四年分である。

三、原の年度別授業と成績

ここでは原の年度別授業と成績を、『東京大学年報』所収の「申報」と峰玄光論文を中心として整理する。

（一）明治二一、二二、二三年度

明治一二年、東京大学総理加藤弘之は、大学に仏書を講義する科目を置くこととし、講師として原を招聘した。この時、聴講した井上哲次郎（一八五六—一九四四）は次のように回想する。

尚おここに忘れることの出来ないのは、明治十一年か、十二年の頃、曹洞宗の禅僧原坦山氏が大学に来て、印度哲学として仏典を講ずるようになったことである。時の大学総理加藤弘之博士が、吾々にこう言うことを言ったことがある。それは、「どうも仏教にも哲学があるやうだから、大学に於ても仏教を講じて貰つたらどうだろう」と言ふことである。吾々当時の学生は、勿論結構なことだと思つたので、直に聴講の希望を述べた。その結果、坦山氏が講師として仏典を講ずるやうになり、その講義は最初「大乘起信論」をテキストとして用ひた。講義の仕方はこれ亦上乘とは思はれなかつたが、その撰んだテキストが好かつたため、学生も喜んで聴き、又学生のみならず、時の総理加藤博士も初めの内はこれを傍聴され、大学以外からは西村茂樹博士のやうな人も来聴され、その他外山正一博士のやうな教授も席に列るなど種々の人々が聴講したやうに、坦山氏の仏典講義は当時学界の注目を惹いた。兎に角、廃仏棄釈の後を受けて仏教の形勢が甚だ振はなかつた時代に、大学で仏典を講じたことは、歴史上注目すべきことである。自分が初めて大乘仏教の哲学に興味を覚えたのはこの時であるが、他にも自分と同様の影響を受けたものが砂くながつたであらうと推察される。自分が今日に及んでも猶ほ大乘仏教の哲学的研究を怠らないのは、抑々何に由つて然

原坦山の東京大学仏教学講義（佐藤）

るかと言へば、固より哲学としてこれに興味を持つからであるが、その興味を喚び起させたものは、蓋し坦山氏である。⁽⁵⁾

このように坦山の講義は井上哲次郎のみならず当時の東京大学での知識層に大きな影響を与えた。この中に登場する西村茂樹（一八二八—一九〇二）は次のように述べる。

明治一三年の頃、東京大学にて印度哲学の学科を置き、曹洞宗の名僧原坦山^{ゴタン}を聘して、学生の為に仏書を講ぜしむと聞き、大学総理加藤弘之氏に乞ひて、往て其の講を聴く。初めは起信論を講じ、次に百法論を講じ、次に輔教論^{ゴク}を講ぜしが、学生の望により是を中止し、円覚経を講せり。⁽⁶⁾

最初の明治一三年は一二年の間違いかもしれない。「大乘起信論」、「百法明門論解」、「輔教篇」の順で講義し、途中で「輔教篇」を「円覚経」に変更したという。ちなみに坦山が明治一四年に行つた報告には「円覚経」、「大乘起信論」、「百法明門論解」だけで「輔教篇」は出ていない。⁽⁷⁾

ここで明治一四年以後に扱われるものも含め、原坦山が東京大学での講義の教材として用いたテキストについてまとめておく。次表は、典籍名、使用年度、そして具体的なテキスト

トと予想されるものとして明治十三年の東京大学図書館の蔵書（『東京大学法学部理学部文学部図書館和漢図書目録』）にある版本をまとめたものである。ただし、明治二二、二三年度についてはそれぞれの年度の違いがはっきりしないので、一応、西村茂樹が挙げた四種の書物であつたとしておく。

典籍名	授業年度	東京大学図書館明治十三年蔵書
『大乘起信論』	明治二二、二三、 一六、一八、二十	法藏『大乘起信論義記』三卷（元禄年間刊） 原坦山『大乘起信論要義』一卷
『百法明門論解』	明治二二、二三、 一九	玄奘訳『大乘百法明門論解』二卷 宗密『円覚経略疏注経』四卷（寛永甲申年刊）
『円覚経』	明治一五、一七、 明治二二、二三、 一四、一六	僧肇『注維摩詰経』一〇卷（寛永一八年刊）
『輔教編』		

以下、簡単にコメントする。『大乘起信論』は馬鳴造、真諦訳とされるが、実際には後代に作られたと考えられている。如来蔵思想の枠組みで真如門、生滅門、本覚、始覚、不覚などの概念を説き、東アジアで重要視された。大正蔵三二巻に収録される。これは坦山にとつても重要な意味を持つ書物である。坦山は独自の仏教的身体理論を構築するが、その根拠となつたからである。坦山によれば人間の心の本体は脳にあり、それは本来悟りにある。しかし腰部の粘液である煩惱が

脊髄を伝わり上昇し覚っている脳の領域に至り、悟りと煩惱とが混じりあう。これが和合識である。これを禪定により分離することを説く。このように『大乘起信論』は伝統的な仏教学の書物であると同時に、坦山自身の仏教理論の根底となる書物である。『大乘起信論』には真諦訳と実又難陀訳があるが、坦山は両者を校正した独自のテキスト『大乘起信論両訳勝義』を作り、さらに独自の観点から『大乘起信論』の要点をまとめた『大乘起信論要義』を著わしている。テキストとしては元禄年間刊の法藏の『大乘起信論義記』三巻を用いたと考えられる。

『百法明門論解』は、天親造、玄奘訳の『大乘百法明門論』に基が注釈をつけたものである。大正蔵四四巻に収録される。これは五位百法とされる法相宗の教理を学ぶために用いられたと考えられる。どの刊本かは図書館の資料にないためわからない。

『円覚経』は仏陀多羅訳とされるが唐代中国で撰述された仏典と考えられている。『大円覚心』を得るための方法を説く。大正蔵一七巻に収録される。禪宗で重要視された。テキストは寛永甲申年（一六四四）刊の宗密の注釈を使っている。

『維摩経』は初期大乘經典で、空思想を説く。大正蔵一四巻に収録される。禪宗で重要視された。『維摩経』は寛永一八年（一六四一）に刊行された僧肇の注釈を使っている。

『輔教編』三卷は中国北宋の仏日契嵩（一〇〇七一—一〇七二）が、歐陽脩（一〇〇七一—一〇七二）ら儒教を信奉し仏教に批判的な科挙官僚たちの批判に応えて記した著作である。契嵩の遺文集『禪津文集』にも収録されている。三卷からなり、上巻は原教、勸書、中巻は広原教、下巻は孝論、壇教贊、真諦無聖論からなる。テキストはわからない。

ところで坦山はどのようにしてこれらのテキストを選定したのであるうか。参考にしたと考えられるのが、明治八年に開校した曹洞宗専門学本校のカリキュラムである。『駒沢大学八十年史』に収録される学科表を見ると、坦山が東京大学で講義したものと同じテキストが入っている。課程は一級から九級まであり、『輔教篇』は二級、『百法問答』は三級、『円覚経略疏』は五級、『註維摩経』は六級、『大乘起信論』は七級に配当されている。

(二) 明治一四年度（一四四年九月から一四五年七月）

この年度から仏教が印度哲学として正式な科目となる。『申報』には次のようにある。

抑余明治十二年十一月ヨリ十四年六月ニ至ルマテ総理閣下ノ顧命ニ依テ本校ニ於テ仏教ノ経論三部ヲ講ス、即チ円覚

原坦山の東京大学仏教学講義（佐藤）

経、起信論、百法明門論解是レナリ、而シテ同年九月ニ至テ仏教ヲ以テ印度哲学ト号シ文学部正科ニ加ヘラル、是レ仏教ヲ以テ大学ノ正科ニ入ルノ権輿ニシテ本教ヲ奉スル者自他共ニ喜躍スル所ナリ、而シテ余ノ担任スル学科書ヲ二部ト定ム、即チ輔教篇、維摩経是レナリ、乃チ此書ニ拠テ文学部哲学科三年及ヒ四年生ニ仏教ノ大意綱要ヲ講授セリ、而シテ本学年十月ヨリ毎月四回一時間ツツ輔教篇ヲ講義シ一学期毎ニ問題四五科ヲ出シ筆記ヲ以テ試業シ点数ヲ査定シテ呈シ、六月終期試業ニ筆記ニ評点ヲ添テ之ヲ呈ス、大略輔教篇中ノ要目ニ依テ其概略ヲ演ル者トス
大凡印度釈教ノ学、広漠ニシテ涯限ナキカ如ク反テ荒誕ノ毀謗ヲ速ク所以、蓋シ明朝ニ至ルマテ結集ノ大蔵経総数六千七百余卷、今之ヲ二年間ニ括撰セント欲スルハ殆ト難事トス、然トモ本部ノ生徒ハ余学ノ力アルヲ以テ其進歩速カナルヲ覚ユ、或ハ速ニ過テ実究ニ乏キヲ憾ム、是専門ノ学者モ免レカタク所、止ムヲ得サルノ弊ト謂ヘシ、其弊ヲ矯メ実学ニ従事セシメント欲スル者ハ余ノ居常勉励スル所ナリ。

ここではまず教材について、明治一二年から一四年までは『円覚経』、『大乘起信論』、『百法明門論』を講義したが、一四年九月から正規の科目になる時から『輔教編』、『維摩経』

を教材として文学部哲学科三、四年に講義するという。授業と試験の方法は、一〇月から毎月四回一時間ずつ『輔教編』を講義し、一学期毎に問題四、五科を出し、筆記を以て試験し点数を査定して呈し、六月終期試験に筆記に評点を添て返却すると述べている。最後に仏教学が広く、容易に学びつくせないものであることを説いている。

さて、いよいよ峰によって公表された原坦山の授業の問題と成績一覧を紹介する。この年の試験問題および成績は次のとおりである。

第一回…一四年一月二一日

問題	成績
一 仏教の大旨	八五点 選科生 嘉納治五郎
二 仏教の他教との異同の大略	七〇点 四年生 有賀長雄
三 仏教所説の性と情との區別	六七点 三年生 三宅雄次郎
四 入天乗の大略	六五点 二年生 森可次
五 三乗の大略	

第二回…一四年二月一三日

問題	成績
一 性情の迷悟をなす所以は如何	九〇点 選科生 嘉納治五郎
二 五乗の區別は何を基本とするや	八〇点 四年生 有賀長雄
三 仏教三世は談すること如何	七五点 三年生 三宅雄次郎
四 三世輪転は何を以て証するや	八五点 二年生 森可次
五 精神不死は何の道理に由るや	

第三回…一五年二月七日試験

問題	成績
一 因果	八〇点 選科生 嘉納治五郎
二 応報	七五点 四年生 有賀長雄
三 頓漸	六五点 三年生 三宅雄次郎
四 權実	
五 幽明	

第四回…一五年三月一四日

問題	成績
一 仏法は何を以て極度とするや	八二点 選科生 嘉納治五郎
二 仏教深広何れの処より着手するや	八五点 四年生 有賀長雄
三 何を以て現実の利益とするや	六二点 三年生 三宅雄次郎
四 現実の要務は何ぞ	

第五回…一五年五月一二日

問題	成績
一 心性の実体	六五点 三年生 三宅雄次郎
二 修証の本性に依る説	
三 因果と本性の関係	
四 修証と因果との區別	
五 他教にも亦因果修証を談するや	

第六回…一五年六月一三日試験問題

問題	成績
一 真如心	七〇点 選科生 嘉納治五郎
二 生滅心	六八点 四年生 有賀長雄
三 煩惱心	七五点 三年生 三宅雄次郎
四 菩提心	
五 真如と生滅と如何か區別するや	

試験は合計六回行われている。問題として出された単語を『輔教篇』と比べてみると、多くは探すことができる。第一回、仏教所説の性と情との區別、人天乗の大略、三乗の大略は卷上にある。第三回の因果応報、頓漸、權實は卷中の「広原教」にある。第五回の修証、本性、因果などは、卷中の「広原教」にある。第六回の真如心、生滅心、煩惱心、菩提心は「大乘起信論」を想起させるが、『輔教篇』下の「壇經贊」(六祖壇經を讀める)の中に真如心、生滅心、煩惱心、菩提心が並べて出てくる。ただ、第四回の「仏法は何を以て極度とするや」、

原坦山の東京大学仏教学講義(佐藤)

「仏教深広何れの処より着手するや」、「何を以て現実の利益とするや」、「現実の要務は何ぞ」などは『輔教篇』に見当たらないので、原坦山の問題意識を述べたものかもしれない。このように問題だけではあるが、講義の模様を伺うことができることが重要である。

受講生は選科・嘉納治五郎(一八六〇—一九三八、後に柔道家・教育者・貴族院議員・日本初の○○委員)、四年・有賀長雄(一八六〇—一九二一、後に法学者・社会学者)、三年・三宅雄次郎(一八六〇—一九四五、後に評論家)、二年・森可次(生没年不詳、不詳)の四人である。成績を平均点で見ると嘉納が八一点、有賀が七四点、三宅が六八点。森が七五点である。成績は、嘉納、森、有賀、三宅の順となっている。答案自体が残っていないので、原坦山がどのような基準で採点していたのかまではわからない。

(三) 明治一五年度(一五年九月から一六年七月)

坦山は「申報」に次のように報告している。

初メテ本学ノ正科ニ印度哲学ヲ列スルノ時ニハ輔教篇、維摩經ヲ以テ一学年ノ教科書ト定メシモ本年ハ維摩經ヲ以テ一学年ノ課業ニ当テ之ヲ哲学三年四年生ニ講授ス。
講授ハ休日ヲ除クノ外毎月四回前年ニ異ナラズ。通常試業

ハ教員ノ見込ニ由ルノ旨ニ原キ、余ハ每学期四五科ノ問題ヲ出シ、兩三日間ノ余裕ヲ假シテ筆記セシメ、先ツ其学力才量識度ヲ察シ評点数ヲ予定シ之ヲ添削講諭シ評点数ハ之ヲ進呈シ本文ハ各人ニ還附ス。但六月終期ノ試業ノミ四五科ノ問題ヲ掲ケ時間ヲ期シテ筆記セシメ筆記ノ際必ス自ら臨監シ其成ルニ及テ之ヲ収メ評点数ヲ添工進呈セリ。

大凡此学ハ多ク荒唐茫洋實帰ナキ如クナル弊ニ陥リ易ク、殊ニ維摩經ハ動モスレハ荒唐ニ流レヤスシ、故ニ之ヲ講授スルニ務メテ其實帰原ヲ探求シ有用ノ功績ヲ得セシメンヲ要ス、因テ受業ノ学生等稍其大略ヲ解スルガ如シ、唯学生僅少学期短促、此学ノ奥旨ニ達スルノ難キヲ惜ムノミ。

第一に、この年度は『維摩經』を、哲学科の三年四年に講義したこと。第二に、講義は毎月四回行ったこと。試験は通常は三日ほどで作成するレポート形式であるが、最後の六月の試験は時間を決めて論述する試験であること。最後に、仏教は荒唐無稽に流れやすく、特に『維摩經』は荒唐に流れやすいので、注意しなければならぬことを述べている。
この年の試験問題および成績は次のとおりである。

第一回…一五年一二月（第一学期試業問題）

問題	成績
一 不可思議	七〇点 四年生 三宅雄次郎
二 神通	六八点 三年生 棚橋一郎
三 因縁	
四 菩薩	
五 蓋纏	

第二回…一六年三月（印度哲学平常試業問題）

問題	成績
一 平等	七〇点 四年生 三宅雄次郎
二 無我	七二点 三年生 棚橋一郎
三 解脱	
四 無為	
五 涅槃	

第三回…一六年六月一三日（試業問題）

問題	成績
一 浄名論	六七点 四年生 三宅雄次郎
二 不思議弁	七〇点 三年生 棚橋一郎
三 煩惱即菩提	
四 権方便	
五 無漏界	

試験の回数が前年の六回から三回に減っている。「申報」に

よれば最初の二回はレポート形式で、最終回だけが試験の形式である。内容は、ほぼ『維摩経』の内容に基づいている。受講生は二人で、四年・三宅雄次郎と三年・棚橋一郎（一八六三—一九四二、後に教育者）である。平均点を見ると、三宅は六九点、棚橋は七〇点である。

(四) 明治二六年度（一六六年九月から一七七年七月）

坦山は「申報」に次のように報告している。

前年予定ノ如ク本年順次ハ輔教篇ニ就キ九月ヨリ之ヲ授ケシニ十月ニ至テ学生皆輔教篇ハ平易ニシテ解シ難カラス更ニ深義ノ書ヲ講授セラレント請フニ因リ乃チ起信論ヲ以テ之ニ換フ是請求ヤ本年学生ノ識力優等ヲ徴スルニ足レリ余モ亦随喜ニ勝ヘサル所ナリ

講授ハ毎月四回前年ノ例ノ如シ、但他ノ科業ノ都合ニ由リ時日ヲ転換セシコトアリ、
 試業ハ通常従前ノ如ク毎学期四五科ノ問題ヲ出シ、数日ノ猶予ヲ仮シ筆記セシメ其学力才識ヲ察シ評点数ヲ定メ之ヲ進呈シ、又筆記ノ添削スヘキ者ハ添削シ各人ニ還付ス、但シ六月終期ノ試業ハ教場ニ於テ時間ヲ定メテ筆記ヲ臨監シ評点数ヲ定メテ共ニ之ヲ進呈セリ

原坦山の東京大学仏教学講義（佐藤）

抑、印度哲学ノ本学正科ニ入りシヨリ僅ニ三周年、而シテ学徒ノ識見年ヲ逐テ進歩スルヲ覺ユ、深ク欣喜スル所ナリ。

第一に、この年は、予定では『輔教篇』を講義する順序であるが、十月になり学生から『輔教篇』あまりに簡単なのもっと奥深いものを講義するように要請があった。そこで十二月から『大乘起信論』を講義することにしたと述べ、それが学生の優秀さを表すものとして喜んでゐる。第二に授業と試験の方法であるが、これは前年と同じである。第三に、印度哲学が正科に入つて三年であるが学生の識見が年を追つて高まつてゐることを喜んでゐる。

試験問題および成績は次のとおりである。

第一回…一六六年十一月（試業問題）

問題	成績
一 仏教の大意	七〇点 四年生 棚橋一郎
二 仏教と他教との異同	六五点 三年生 井上円了
三 仏教性情の分解	
四 五乘の弁解	
五 三世輪転の説	

第二回…一七年三月（試業問題）

問題	成績
一 心真如 二 心生滅 三 本覚 四 始覚 五 無明	六七点 四年生 棚橋一郎 七〇点 三年生 井上円了

第三回…一七年五月（通常試業問題）

問題	成績
一 真如生滅の別相 二 真如本覚の異同 三 始本二覚の弁 四 経論中何爲そ無明の実体を説さる 五 何を以て迷悟を実験するや	七五点 三年生 井上円了

第四回…一七年六月一三日（学年試業）

問題	成績
一 心真如之実体 二 心生滅之現象 三 常住心性 四 染相本末 五 従生滅門入真如門	七七点 四年生 棚橋一郎 七八点 三年生 井上円了

試験は四回である。第一回が『輔教篇』の内容で、残りの

三回が『大乘起信論』である。『輔教篇』の出題内容は前回とほぼ同じである。『大乘起信論』についてみると、第二回は「心真如」、「心生滅」、「本覚」、「始覚」、「無明」という『大乘起信論』教理の中心概念について問うている。そして第三回になると「真如生滅の別相」、「真如本覚の異同」、「始本二覚の弁」として、二回目で提示された概念の応用的な問題を扱う。さらに「経論中何爲そ無明の実体を説さる」、「何を以て迷悟を実験するや」は、『大乘起信論』のテキストから離れていると考えられる。それらは原の独自の身体理論、すなわち煩惱の本体は腰にある粘液であり、それが脳中にある本覚と接触して和合識になる、ということを書いていたのでないかと想像される。四回目の「心真如之実体」、「心生滅之現象」、「常住心性」、「染相本末」、「従生滅門入真如門」からは再びテキストの解釈に戻ったように思われる。

受講生は四年・棚橋一郎と三年・井上円了（一八五八一—一九一九、仏教哲学者、哲学館創設者）の二人である。棚橋の平均点数は七一点。井上の平均点数は七二点である。

(五) 明治一七年度（一七年九月から一八年七月）

この年は『申報』がないので、具体的なことはわからない。ただ、試験問題と成績一覧があることから授業内容が推測で

きる。テキスト『維摩経』であり、試験問題と成績は次のとおりである。

第一回…一七年二月（第二学期試業）

問題	成績
一 浄名の宗義	七八点 哲学四年 井上巴了
二 不可思議解脱	七〇点 同三年 日高真実
三 仏国	六五点 同 長澤市蔵
四 神通	七五点 同 板倉銀之助
	七〇点 和漢文学三年 戸田恒太郎
	六八点 同 松本源太郎

第二回…一八年三月（第二学期試業）

問題	成績
一 思議窓	八五点 哲学四年 井上巴了
二 平等法	七八点 同三年 日高真実
三 神力	七五点 同 長澤市蔵
四 須弥を芥子に納るる説	七七点 同 板倉銀之助
五 神力と不思議の異同	七七点 和漢文学三年 松本源太郎
	七七点 同 戸田恒太郎

第三回…一八年五月（通常試業問題…第三学期）

問題	成績
一 仏国は何れの所を指すや	六九点 同三年 日高真実
二 不可思議解脱如何か住するや	六七点 同 長澤市蔵
三 仏教の益たる何を専らとするや	六八点 同 板倉銀之助
四 仏教の語怪む可き者多し如何か宗義を了せん	六八点 和漢文学三年 松本源太郎
五 仏教の所談荒唐虚設なるか如し如何か宗旨を了せん	六七点 同 戸田恒太郎

第四回…一八年六月（学年試業問題）

問題	成績
一 浄名論	八〇点 哲学四年 井上巴了
二 不思議弁	六五点 同三年 日高真実
三 仏国論	六五点 同 長澤市蔵
四 十方世界弁	六八点 同 板倉銀之助
五 不二法門解	六七点 和漢文学三年 松本源太郎
	六七点 同 三年 戸田恒太郎

試験は四回である。『維摩経』の試験は明治一五年度に続き二回目だが、内容は前回よりも細かくなっている。また、第三回の問題の中、「三 仏教の益たる何を専らとするや」、「四 仏教の語怪む可き者多し如何か宗義を了せん」、「五 仏教の所談荒唐虚設なるか如し如何か宗旨を了せん」、は坦

山の問題意識が反映したものと考えられる。

受講生は六名である。哲学科四年・井上円了、三年・日高真実（一八六四—一八九四、後に教育学者）、長澤市蔵（一八六二—一九一五、後に教育家）、板倉銀之助（不詳）、和漢文学三年の松本源太郎（一八五九—一九二五、後に教育家）、戸田恒太郎（一八六四—一九三四、後に内務警察官僚）である。個々の成績は、井上が平均七八点、日高が平均七〇点、長澤が平均六八点、板倉が平均七二点、松本が平均七〇点、戸田が平均七〇点である。

ところで井上円了の授業ノートの中に、この時のものと思われるものがあり、翻刻され東洋大学のホームページで公開されている。内容を見ると、わずかに二頁に満たない量で、「蓋纏煩悩」「総持言ニモ文字ニモ用ユ」などのように語句の解説が書いてある程度である。

〔六〕明治一八年度（一八八九年九月から一九〇一年七月まで）

「申報」に次のようにある。

十八年教科書改正ノ旨趣ニ由リ同年九月第一期ヨリ大乘起信論ヲ以テ一学年教科書トス本学年生徒十三名、蓋シ明治十四年印度哲学ヲ以テ正科ニ収メシヨリ已来本年ヲ以テ尤モ生徒ノ多数トス、而シテ十九年終期ニ至テ試業二応セ

サル者一人、余ハ皆昇級ス
諸学科ノ交渉ヨリ科業時間ノ転換アルノミニシテ学務ニ付
キ異常ノ事ナシ

大凡通常流布ノ仏教妖怪奇異ノ説多ク哲学ト称シカタキ者
少ナカラス、故ニ余常ニ努メテ實際真理ヲ談スルニ本学生
徒稍信解スル者アルヲ覚フ、只科業日浅キカ為ニ円満ノ結
果ニ至ラサルヲ惜シムノミ。

まず明治一八年の教科書改正の旨趣に由り、この年から『大乘起信論』を教科書とすること。第二に、生徒が二三名であり、この数は明治一四年印度哲学を以て正科に収めてより已来、最多であることを説く。

この年度の試験問題および成績は存在しないので、具体的な内容はわからない。ただ清沢満之（一八六三—一九〇三）がこの年に三年生として受講しているはずである。その際の成績表によれば、印度哲学の中、吉谷覚寿の授業の成績は百点だったが、坦山の授業の成績は七〇点であったという。

〔七〕明治一九年度（一九〇一年九月から一九〇二年七月まで）

「申報」に次のようにある。

従前定ムル所ノ例規ニ依リ十九年初学期ヨリ一カ月四時教

科書大円覚経ヲ十三名ノ生徒ニ講授ス

第一第二第三通常試業、例規ノ如ク評点数ヲ進呈ス

二十年六月終期試業ニ至リ十三名ノ中、選科三年生徒高嶺三吉、重病ニ罹リ試業ニ応スル能ハス七月ニ至テ没ス、余ノ十二名ハ皆昇級ス

七月帝國大学ノ報命ニ由リ次学年文科大学講師ノ囑託ヲ承諾ス

第一に、一か月四時、『円覚経』を一三名の生徒に講授した事。第二に、試験が三回であったこと。第三に特別な出来事として、選科三年の高嶺三吉が重病に罹り試験を受験できず、七月に亡くなったことと、余の一二名は皆昇級したことが説かれている。

この年の問題と成績もないので具体的なことはわからないが、ただ手掛かりになりそうなものがある。それが『高嶺君遺稿』である。これは東京大学在学中に亡くなった高嶺三吉（一八六二—一八八七）の授業ノートを友人が編集して明治二二年六月に刊行したものである。中では原坦山、寺田福寿、吉谷寛寿、生田（織田）得能が序、跋文などを著わしている。内容は、印度哲学（一頁から五五頁）、老荘の道德と儒教の道德との同異（五六頁から六四頁）、降靈術を論ず（スピリチュアリズム）（六五頁から八八頁）の三部からなる。こ

原坦山の東京大学仏教学講義（佐藤）

の中の印度哲学が、原坦山の講義と関連するのではないかと考えている。

内容は全五回からなり、それぞれ五つの小さなレポートからなっている。項目を列挙すると次のようである。

第一回	第一 仏教大意 第二 仏教と他教との区別	第二回	第一 真如と生滅との分界 第二 始本二覚の弁	第三回	第一 円覚 第二 仏性 第三 一法 第四 正因 第五 止観定恵
第三 一心摩訶衍 第四 心真如 第五 心生滅	第三 真如本覚の同異 第四 無明の実体 第五 迷悟の顯相	第五回	第一 本学特別の主義 第二 一大事因縁 第三 藏来の概略 第四 修証の概略 第五 金鉞の法理		
第四回	第一 無明 第二 本来成仏 第三 輪廻 第四 二障 第五 方便三種				

このように五回にわけて問題を出し、さらに一回につき五問程度の問題を出す形式が、これまで見てきた原坦山の授業に似ている。内容を見ると第一回と第二回は用語から『大乘起信論』であるが、第三回目からはこの年のテキストである『円覚経』の内容になっている。

さらに原坦山が書いた序文にも関連をうかがわせる言葉がある。

高嶺氏の遺稿、多からず。纔かに是の一冊を存す。蓋し皆な在学之日、余の験閱に係る者なり。(高嶺氏之遺稿不多、纔存は一冊、蓋皆在学之日、係余之験閱者)〔高嶺君遺稿〕(一頁)

「余の験閱に係る」は試験として原の目を通つたものを意味すると考えられる。

ちなみに同じ遺稿に吉谷寛寿の『天台四教儀』講義ノートがあり、鈴木朋子により翻刻されている。鈴木朋子『高嶺遺稿』印度哲学(吉谷寛壽口授・天台四教儀)翻刻(お茶の水女子大学附属図書館、二〇一九年)これは原坦山と共に印度哲学を講義していた吉谷寛寿の『天台四教儀』講義ノートである。

(八) 明治二〇年度(二〇年九月から二一年七月)

この年は「申報」がないため具体的な内容はわからない。ただテキストの順序から『大乘起信論』を講義したものと考えられる。この年には、後に教育学者になる谷本富(一八六七—一九四六)、三上参次(一八六五—一九三九)が聴講しており、彼らの証言が残っていることから、この年の講義内容をうかがうことができる。具体的なことは次項で述べる。

四、受講生の証言

続いて原の講義を受けた人の、原に対する評価を知るために、三宅雄二郎、谷本富、三上参次の三人をとりあげる。

(一) 三宅雄二郎

明治一四年に『輔教篇』を、明治一五年に『維摩経』を聴講している。三宅は「自伝、自分を語る」の中で原の授業を次のように回想している。

その頃文学部の哲学科で東洋哲学を支那哲学と印度哲学とに分ち、印度哲学に仏教学者原坦山氏及び吉谷寛寿氏を聘した。坦山と言えば相応に評判が高く、見た所から變つて居つた。短軀で肥満し、何時も酒臭く、磊落その物という調子で、話が面白く、雑談で止め度もない。

然し教科書に拠つて何の益を与えず、輔教編とか、維摩経とか、講釈するはするけれど、講釈という程のものでなく、学生自ら読んでも解するを得、解し得ぬ処は聞いても解しない。

輔教編や、維摩経や、文を以て優り、之を講釈すれば美人の首を解剖するが如きになつてしまふ。著者契嵩は文に於

て唐宋八家に列するに足り、文を以て儒徒を導く意があり、原氏も四書五経を読んだ者に仏教の大意を知らずにも適當の書としたろう。日本の儒者も之を読んで得る所少くなかつたろうに、喰わず嫌いで之を読まぬのが多かつた。原氏は昌平校出身で漢学の素養深く、それで本書を撰んだものの、不立文字でもあり、事々しく講釈する気にならなんだと思われる。

維摩經の著者は判明せぬが、原氏が語るよう、「先日鳥尾得庵が維摩經は必ず釈迦が書いたと言った。その証拠として釈迦でなければああい文章を書くことができぬというのである。面白いことを言うではないか」と。斯かる心持では、くどくどしく字義を講じたりすることが出来まい。医学に興味を覚え、惑病同源と説いた。幾分の理があるけれど、生理解剖の翻訳書を読むか読まぬで人びらに脳神経の事を説き、時として全く見当を外れるので、人を困らせた。そういう講釈をせず面白可笑しく人を吹飛ばせば宜かつた。自ら曰う「重くならぬ肺病は必ず直して見せる」て。そういう事は口ばかりでなかつたろう。

これを見ると、三宅にとつて原坦山の授業は学問的には参考にならなかつたものと考えられる。三宅の平均点は、明治十四年度、十五年度とも六〇点台後半と、けして高くはなかつた。

た。見方によつては、三宅の坦山に対する姿勢が、こうした点数に現れたのかもしれない。

(二) 谷本富

谷本富は明治二〇年に『大乘起信論』を聴講している。當時の状況について『教育と宗教』（一九二五年）の中で次のように回想している。

無明業障と云ふ事がある。是は普通に読んだら「ムメイギヨウシヨウ」と云ふが、仏教では「ムメウゴツシヨウ」と読む。業障は業の障りと云ふのぢや。其業の本は無明だと云ふが無明が分らぬ。ところが曾て私共の先生にド偉い先生があつた。それは禪宗で、明治初め頃には或は禪宗第一の人傑だと言はれた原坦山と云ふ人であります。背の低い事私と同じである。そして私より一層肥えて居た。其人が東京の大学へ来て『大乘起信論』を講義をする。無明業障とやる……無明は何ぢや、一体由来が分らぬ。お前達に分るまい。ワーツと云ふ様な大きな声を出して遺る。此無明と云ふのは、昔から八家九宗あるけれども、どいつもこいつも分つた奴がない。是が分つたのは坦山一人ぢや。之を変なものと説くから幽霊の様になるのぢや。幽霊などが仏教の悟りの上に在つて堪るものか、馬鹿な奴ぢや。坦

山は分つて居ると。斯う云ふ風にやる。さうして大きな草紙の様なものを擴げる。黒板は使はぬ。又あの調子では黒板は使はれぬ。「皆能く見て居れ」と言ひながら、大きな字を白紙に書いたのを机の前に下げる。「ホーラ見ろ、能く見ろ、斯う能く見ろ、斯う云ふ文字ぢや」と云ふのです。無明と云ふものは空なものではないと云ふのぢや。無明は無明と云ふものがあつて眼に見えるのぢや。無明と云ふ奴があるから、迷ひが起るのぢや。無明をなくしたら宜い。能く見い此処にあるのが脳髓ぢや。此処にあるのが脊髓ぢや。此処にあるのが神経ぢや。脳脊髓の兩脇に黒い筋がある、これが無明だ。粘纏溷濁の液ぢや。此液を持つて居るから、神識が明かでなくて、無明業障と色々な迷が起るのである。若し座禪修行をして自分で悟りを開けると、此黒い液が追々澄む。その澄んだ処が悟りの開けた仏菩薩の境涯ぢやと。

大体こんな風です。阿呆らしうて聴いて居れぬです。私は坦山先生が死んだ時に解剖して見たらよかつたと思つた。尤も此坦山と云ふ人は、若い時に医者の稽古をしたから、斯んな事を云ひ出したのですが、今の医学とは違ひます。其頃は蘭流の医者で『医範提綱』と云ふ書物の中に、神經と云ふものは液体の様に書いてあるから思ひ付いたらしい。併し何が何でも余り阿呆らしいから、あんな糞

坊主は追ひ出せと云ふ様な事になって、先生土曜日何かに来て講義しようと思うたけれども、学生は一人も出ない。隣の部屋に居つて、ガタガタ云はせて居つたけれども行かない。兎に角二三回重ねて行かなかつたから、とうとう怒つて止めて仕舞つた。それは今日のストライキとは話が違ふ。只禪宗風に取扱つた迄だ。

ここで説かれる内容は二つの意味で強烈である。第一に、原坦山の授業の模様であり、独自の起信論に基づく身体理論を大学で堂々と語つてゐることがわかる。第二に、坦山に対する学生たちの態度で、授業にあきれたからポイコットをしたということである。坦山はこの年に東京大学講師を止めてゐるが、ひよつとしたら学生とのトラブルが原因の一つかもしれない。

(三) 三上参次

明治二〇年に谷本とともに『大乘起信論』を聴講したものと考えられる。

印度哲学では原坦山と云ふ人の『大乘起信論』と云ふ三冊ものを教科書にして講釈を聴いたのです。原先生は当時学僧として屈指の人であつた。『大乘起信論』のやうなむつ

かしいものを可なり興味多く聞いたものです。先生は妙な癖のある学者で、一種又仙骨を帯びた人であつた。死なれる時に、その前から原坦山何月何日に死すると云ふやうなことを知人に知らして、さうしてその時に入定したと云ふ人である。それで始終、人間の精神には無明と云ふものがあり、それが基で病気になること云ふことを真面目に言はれる。或る時の如きは、自分の説を英文学者に英訳して貰つて、世界各国の学者に送つたけれども、何処からも返事を寄越さぬと云つて、愚痴を言はれたことがあつた。是れは来ないのが当然だと思ふ。併し仏学の上では大變に偉い人であつた。

三上は谷本とは違い、坦山を尊重している姿勢がうかがえる。ただ一方では坦山の変つた行動については冷めた目で見てることがわかる。

五、結語

以上、峰玄光「原坦山師時代における帝国大学の仏教研究」収録の資料「原坦山師試験点表」を紹介した。これは明治一四年度から一七年度までの四年分の試験問題と成績であつたが、試験問題からは具体的な授業内容を知ることができ、

成績からは受講生を具体的に知ることができた。

試験は明治一四年度が六回、一五年度が三回、一六年度が四回、一七年度が四回であつた。形式は、最後の一回を除き、レポート形式であつた。点数は嘉納治五郎の九〇点が最高と、容易に高得点は与えない方針であつたことがわかる。試験問題から、基本的にはテキストの内容を問うものであるが、中にはテキストを離れ、坦山の問題意識を反映した問題も出されてきたことが分かつた。

受講生の反応をみると、講義自体は雑談が多く講読の内容の深まりはないこと、あるいは自分の惑病同源の説を説いていたなど、知識の伝授という点では満足していないことがうかがえる。ただ、それでは全く意味のなかつた講義かといえばそうではなく、井上哲次郎のように仏教と哲学との関係を探る糸口を得たものもいるし、井上四丁のように、『大乘起信論』を仏教哲学の根底に置く思想の参考になつたと思われる。さらには独自の身体理論など、仏教を考える方向が常人とは異なるとはいへ、仏教というものを新しい形で真剣にとらえていこうとする姿勢は、学生たちに影響を与えたと考えられる。

思えば初期の東京大学の仏教講義は対照的な二人の講師、原坦山と吉谷覺寿によつて運営された。坦山は、よく言えば豪快、悪く言えば適當、あるいは常人離れした存在であ

る。他方、吉谷は典型的な江戸時代の学僧で、緻密である。学生たちには詳細な教理を筆者させ、それを暗記することを求める。二人の態度は採点にも表れている。前に紹介した清沢満之の場合、吉谷の試験は一〇〇点であったが、坦山は七〇点。おそらく吉谷は必要な教理を暗記すれば満点を与えるタイプの講師だったのに対し、坦山は何が減点されたのかはわからないが、安易に高得点は与えないタイプの講師である。こうした対照的な二人の講師により大学という場で近代的な仏教学が発見されたことは興味深い。

最後に付録として、坦山と吉谷の講義をまとめた表を提示するので参考にしていただきたい。

〈参考文献〉

・一次文献

東京大学出版会『東京大学年報』(東京大学出版会、一九九三年)

峰虎溪「原坦山師時代における帝国大学の仏教研究」(『仏教

文芸』二卷一号、一九〇三年一〇月)

峰玄光「原坦山師時代における帝国大学の仏教研究」(『仏教

文芸』二卷二号、一九〇三年一月)

・二次文献

荒木見悟「輔教編・禅の語録一四」(筑摩書房、一九八一年)
オリオン・クラウタウ『近代日本思想としての仏教史学』(法

蔵館、二〇一二年)

木村清孝「原坦山と「印度哲学」の誕生」(『印度学仏教学研究』九八、二〇〇一年)

同「詳論・原坦山と「印度哲学」の誕生」(『東アジア仏教—その成立と展開—木村清孝博士還暦記念論集』、二〇〇二年)

佐藤厚「吉谷覚寿の東京大学仏教学講義」(中央学術研究所「中

央学術研究所紀要』四六、二〇一七年)

古田紹欽「東京大学に於ける印度哲学講座」(『国史論纂』大倉邦彦先生献呈論文集)、一九四二年)

〈キーワード〉原坦山、東京大学、印度哲学、大乘起信論、
輔教編

後注

(1) 本稿は二〇二三年五月に東北大学で開催された日本近代仏教史研究会での口頭発表をもとに作成したものである。当日、発表に対してアドヴァイスをしていただいた、オリオン・クラウタウ先生、山本伸裕先生、ブレニナ・ユリア先生、川邊雄大先生に感謝申し上げます。なお原稿は、日本近代仏教史研究会の学会誌に投稿することも考えたが、現在非常勤講師としてお世話になっており、原坦山と関連がある駒澤大学の論集に投稿させていただくことにした。

(2) 原坦山についての最近の研究はオリオン・クラウタウ『近代日本思想としての仏教史学』（法蔵館、二〇二二年）中の第一章「日本仏教」以前・原坦山と仏教の普遍化」の七五頁にまとめられている。

(3) 渡部清「仏教哲学者としての原坦山と「現象即実在論」との関係」（『哲学科紀要』二四、一九九八年）

(4) 佐藤厚「吉谷覚寿の東京大学仏教学講義」（中央学術研究所『中央学術研究所紀要』四六、二〇一七年）

(5) 国会図書館デジタルライブラリで閲覧（二〇二三年二月一日）
(6) 峰玄光「原坦山師時代における帝国大学の仏教研究」（『仏教文芸』二巻一号、一九〇三年一〇月）六頁

(7) 大内青巒「原坦山老師の事歴」「是等の事に就て何にか書き留められたものか有らうと思つて段々探しましたか、殆んど

二十巻計もある、中にはチョイ々々々した色々な物か有つて現今の博士連中井上四了とか三宅雄次郎とか云ふやうな人だが、大学の学生で老師に起信論講義を聞いた時分の点表なども這入て居るか、其等を見ると余程面白い」三二頁—三三頁

(8) 井上哲次郎「井上哲次郎自伝」（富山房、一九七三年）七頁

(9) 西村茂樹「余が仏学の始」（『西村茂樹全集』四、日本弘道会、二〇〇六年）一八七頁

(10) 「抑余明治十二年十一月ヨリ十四年六月ニ至ルマテ総理閣下ノ顧命ニ依テ本校ニ於テ仏教ノ経論三部ヲ講ス、即チ円覚経、起信論、百法明門論解是レナリ。」『東京大学年報』卷二（東京大学出版会、一九九〇年）、一八一頁、一八二頁

(11) 駒沢大学八十年史編纂委員会『駒沢大学八十年史』（駒沢大学八十年史編纂委員会、一九六二年）七二頁

(12) 『東京大学年報』卷二（東京大学出版会、一九九三年）一八一—一八二頁

(13) 峰虎溪「原坦山師時代における帝国大学の仏教研究」（『仏教文芸』二巻一号、一九〇三年一〇月）六頁、七頁

(14) 『東京大学年報』卷二（東京大学出版会、一九九三年）二八九頁

(15) 峰玄光「原坦山師時代における帝国大学の仏教研究」（『仏教文芸』二巻一号、一九〇三年一〇月）七頁、峰玄光「原坦

山師時代における帝国大学の仏教研究」〔仏教文芸〕二巻二号、

一九〇三年一月) 三頁、四頁

(16) 『東京大学年報』巻二(東京大学出版会、一九九三年)

四〇三、四〇四頁

(17) 峰玄光「原坦山師時代における帝国大学の仏教研究」〔仏

教文芸〕二巻二号、一九〇三年一月) 四頁

(18) 峰玄光「原坦山師時代における帝国大学の仏教研究」〔仏

教文芸〕二巻二号、一九〇三年一月) 四頁から六頁

(19) <https://www.toyo.ac.jp/about/founder/tecp/encyo/33402/>

井上円了の学習ノート翻刻 一——六——六 仏書講録

(20) 『東京大学年報』巻五(東京大学出版会、一九九三年)

一三四頁、一三五頁

(21) 「哲学科旧三年試業点表」〔西洋一〇〇 フェノロサ、印度

一〇〇 吉谷、七〇 原、支那九〇 島田〕暁烏敏、西村見

暁共編『清沢満之全集』第三巻、法蔵館、一九五七年、

六〇七頁

(22) 『東京大学年報』巻五(東京大学出版会、一九九三年)

五一頁

(23) 三宅雪嶺「自分を語る」〔三宅雪嶺〕、日本図書センター、

一九九七年) 一七〇頁——一七一頁。原著は朝日新聞社、

一九五〇年

(24) 谷本富『教育と宗教』(同文館、一九二五年) 五三五—

五三七頁

(25) 「昭和十一年一月一九日三上参次先生談旧会速記録(第

三回)」『日本歴史』一九八一年一月号、吉川弘文館、

一九八一年、一一六頁——一七頁

〈キーワード〉原坦山、東京大学、試験問題、点数、印度

哲学

【付録】

原坦山と吉谷覚寿の東京大学仏教講義：明治12年から明治21年

年度(明治)	学年	原坦山			吉谷覚寿		典故
		教材	数	聴講/学生	教材	数	
12年度 12.9-13.7	随意	大乘起信論 百法明門論解 輔教篇 円覚経	?	井上哲次郎 加藤弘之 西村茂樹	—	—	井上哲次郎自伝、 西村茂樹全集、申 報(坦山)
13年度 13.9-14.7	随意	同上か?	?	?	—	—	申報(坦山)
14年度 14.9-15.7	3, 4年	輔教篇	4	嘉納治五郎 有賀長雄 三宅雄次郎 森可次	八宗綱要	?	申報(坦山、吉谷) 峯論文
15年度 15.9-16.7	3, 4年	維摩経	2	三宅雄次郎 棚橋一郎	四教儀	?	申報(坦山、吉谷) 峯論文
16年度 16.9-17.7	3, 4年	輔教篇 大乘起信論	2	棚橋一郎 井上円了	八宗綱要	?	申報(坦山、吉谷) 峯論文
17年度 17.9-18.7	3, 4年	維摩経	6	井上円了 日 高真実 長澤市蔵 板 倉銀之助 戸田恒太郎 松本源太郎	四教儀?	?	峯論文
18年度 18.9-19.7	2, 3年	大乘起信論	13	? 井上円了 ? 清沢満之	八宗綱要	13	申報(坦山、吉谷)
19年度 19.9-20.7	2, 3年	円覚経	13	? 清沢満之 上田万年 高嶺三吉(選 科3、病没)	四教儀	9	申報(坦山、吉谷)
20年度 20.9-21.7	2, 3年	大乘起信論?	?	上田万年 三上参次 谷 本富	仏教要旨	9	申報(吉谷)
21年度 21.9-22.7	—	—	—	—	仏教要旨	14	申報(吉谷)

* 峰論文 = 峰虎溪(女光)「原坦山師時代に於ける帝国大学の仏教研究」

* 吉谷覚寿の講義については、佐藤厚「吉谷覚寿の東京大学仏教学講義」(中央学術研究所『中央学術研究所紀要』46、2017年)によった。